

令和3年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる
「共同研究班」 研究報告書

令和4年12月26日現在

研究課題名	スラブ・ユーラシア地域を中心とする境界・国境研究		
担当者	氏名		所属機関・職
	1	岩下 明裕	スラブ・ユーラシア研究センター・教授
班員	氏名		所属機関・職
	廣瀬 陽子		慶應義塾大学・教授
	専門とする研究分野		
	旧ソ連地域研究、国際政治ナゴルノ・カラバフ		
研究テーマ			
ナゴルノ・カラバフ問題			

研究成果の概要

本研究の成果は主に二つである。

第一に、班員の廣瀬陽子が文献調査やインタビュー調査などをして調査を蓄積し、さまざまな研究につながる大きな基盤を得ることができた。

第二に、10月22日に、「第二次ナゴルノ・カラバフ紛争：境界への影響と地政学的変動」というタイトルのウェビナーをおこなった。そして、この成果が特に強調すべき主たる成果である。

ウェビナーの趣旨は以下の通りである：2020年9月27日から11月10日まで、アゼルバイジャンとアルメニアの間でいわゆる「第二次ナゴルノ・カラバフ紛争」が勃発した。かつてとは異なる、UAVなどが多用された現代戦による戦いが注目を浴びた戦闘は多くの被害を出したものの、アゼルバイジャンが事実上の勝利をするかたちで和平合意が結ばれた。

その結果、かつてアルメニア人勢力が占拠していたナゴルノ・カラバフと周辺の緩衝地帯のうち、緩衝地帯の全て、そしてナゴルノ・カラバフについてはその約40%の領土をアゼルバイジャンは奪還した。そして、アルメニア人勢力が死守したナゴルノ・カラバフ領にはロシアの平和維持軍が停戦監視に入ることとなった。他方、アルメニア本土とナゴルノ・カラバフを結ぶ新しい回廊がアゼルバイジャン領経由で建設されることになり、それと引き換えにアルメニア南部のイランに接する国境部分が、アゼルバイジャン本土と飛び地・ナヒチェヴァンを結ぶ回廊としてアゼルバイジャンに提供されることになった。なお、アゼルバイジャンとナヒチェヴァンを結ぶ回廊については、ロシアのFSBが停戦監視を行うこととなっている。

この新しい展開により、当地の「境界」に大きな変化が生まれただけでなく、地政学的な変動が顕著となっている。特にロシアは軍事プレゼンスを展開できるようになり、トルコはナヒチェヴァン経

由でアゼルバイジャンと地続きになり、またカスピ海経由で中央アジアとも結ばれた。南部の回廊に展開されると考えられている鉄道の影響も大きいと見られている。そして、アゼルバイジャンの中央アジアにおける影響力も急速に強くなっている。しかし、イランの地域における影響力については翳りが出そうである。

そして第二次ナゴルノ・カラバフ紛争で生まれた地政学的変動は、アフガニスタン情勢によって生まれた地政学的変動とも連動し、より大きな変化を生み出す可能性が高い。

このように第二次ナゴルノ・カラバフ紛争の影響は、当地の境界に変化をもたらしただけでなく、地政学的にもかなり大きいと言える。本ワークショップでは、この状況を、ナゴルノ・カラバフ紛争に関わりの大きい国々を専門とする研究者による分析で明らかにする。

そして、当日の担当は以下の通りとなる：

1. 岩下明裕[SRC] 冒頭挨拶 5分
2. 廣瀬陽子[慶應義塾大学] (全体の構図と概要説明、アゼルバイジャン 5分+10分)
3. 吉村貴之[早稲田大学] (アルメニア 10分)
4. 今井宏平[アジ研] (トルコ 10分)
5. 田中浩一郎[慶應義塾大学] (イラン 10分)
6. ダヴィド・ゴギナシュヴィリ[ジョージア大使館、SFC 研究所上席所員] (ジョージアを中心とした地域情勢 10分)
7. 宇山智彦[SRC] (ロシア・中央アジア情勢も踏まえた討論 15分)

その後、フロアからの質問に基づいた質疑応答のパートを設け、全体として2時間超の極めて充実したウェビナーとなった。各報告者の報告は極めて充実しており、時間が足りなかったものの、ナゴルノ・カラバフ問題がそもそも日本であまり注目されていない中、関係する国々を研究する第一線の専門家がそれぞれの立場から当該問題について分析するような企画は、他に類例がなく、極めて独創的でありながら、現在のウクライナ問題にもつながる旧ソ連の諸問題を浮かび上がらせ、大変大きな意味を持ったと考える。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）〈謝辞なし〉

廣瀬陽子・吉岡明子「イラク・クルディスタン地域の国家性——未承認国家論からの検討」今井宏平編『クルド問題 非国家主体の可能性と限界』岩波書店、2022年、27-51頁。
 廣瀬陽子「南コーカサスと「狭間の政治学」」渡邊啓貴監修・公益財団法人日本国際フォーラム編『ユーラシア・ダイナミズムと日本』中央公論新社、2022年、279-298頁。
 廣瀬陽子「アフガン情勢を受けての旧ソ連・近隣諸国の動き」『現代インド・フォーラム』No. 52、2022年、pp. 25-34。
 廣瀬陽子「ロシアの「レッドライン」と2021年の対ウクライナ関連の動き」『国際情勢紀要』92号、2022年、109-122頁。
 廣瀬陽子「ロシアの非合理的な対ウクライナ攻撃- プーチン体制終焉の序曲か?」『改革者』2022年4月号、28-31頁。
 廣瀬陽子「それでも、プーチンは戦争を選んだ」『CNN ENGLISH EXPRESS』2022年6月号。
 廣瀬陽子「ロシアの対アフリカ政策」『国際問題』[焦点：アフリカに向き合う世界] 2022年6月 No. 707、39-48頁。
 廣瀬陽子「ロシアと「近い外国」— ウクライナ危機で変わる関係性」『三田評論』7月号 [特集 国際秩序のゆくえ]、2022年7月、30-35頁。
 廣瀬陽子「ウクライナ侵攻に見るロシアと未承認国家の関係の変化：南オセチアでは親口派「大統領」が敗北」【nippon.com】2022年7月22日 (<https://www.nippon.com/ja/in-depth/a08106/>)。

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト 特になし

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。